



〔地図の“色”〕

— 地図情報としての“色”に、臨場的なイメージを抱く子ども —

東京学芸大学名誉教授 次山 信男






① “地図の旅”に“季節”が出てこない？

7月に入って、東京の4年生の教室で、地図帳を使って読図の学習をすすめていました。「夏休みに地図を使っての生活を！」という先生の思いがあるのでしょうか。地図上の鉄道区間を乗車したつもりで、その車窓から見える沿線の様子を簡単な旅行記に綴っていく作業です。

先生と子どもたちは話し合って、地図帳の図幅の中


から、北海道の釧網本線（「北海道地方南部の地図・拡大図（p.46）」）を選び、釧路から網走までを“旅”することにしました。子どもたちはこの区間を、実際にはまだ誰も乗ったことがなく、同じ条件で、地図情報だけを頼りに作業していくことになるからです。

子どもたちはそれぞれに、この未知の路線に沿って旅立ちをします。（個人作業）

どの子どももはじめに眼をつけるのが、地図にある絵記号です。（）・（）・（）・（）・（）は、土地利用の凡例の“色”と重ねて、それぞれ工場・海産物・自然・牧場・畑作ととらえて綴っていきます



帝国書院
『楽しく学ぶ小学生の地図帳』
（初訂版） p.46
「①北海道地方南部の地図」

す。しかし、大根ではない（）には、どの子どもも筆を止めます。先生は「畑作のようす（p.45 資料図）」にある凡例に注目させ、砂糖の原料になるビートであることを伝えていきます。

また、子どもによって車窓から視野に取り込む範囲が違います。山や川や湖なども路線のすぐ近くの情報を拾って綴っていく子どもいれば、とても車窓からは望めない遠方の情報までも取り込んで綴っていく子どもいます。地図を追う距離感（縮尺）の違いがあるからなのでしょう。

やがて、書き上げた“旅行記”を互いに読み合い、それぞれのよいところが紹介されていきます。「手をふると、タンチョウがどこまでもついてきます！」「ぼくは途中下車をして、しばらくたての牛乳をごちそうになった！」「阿寒湖のマリモが見たかったけど、ずいぶんはなれていて行けなかったのが残念でした！」などが出されると拍手が湧きます。



ここで先生は、『ほんとうに旅しているように書けたね！』と、子どもたちの作業（読図）を認めながら、『ところで、みんなの書いた旅行記は春・夏・秋・冬、どの季節の旅かな？』と、問いかけていきます。おそらく“旅行記”の中に、地図の“色”から直接臨場的イメージを抱く子どもた

ちを見取ったのでしょうか。子どもたちの作業には、収穫や紅葉の“秋”の旅や、そして、雪に覆われた“冬”の旅が出てこないのです。

『みんなが知っている北海道はどんなところ？』『寒いところ！』『雪がいっぱい降るところ！』『では、季節を“冬”にしたら、この鉄道の区間はどんな旅になるだろう？』『えっ、冬の旅って…』『先生、つぎの時間に“冬の旅”を書いていいですか！』

はたして、子どもたちはどのような“冬の旅”を書いていったのでしょうか。地図にある絵記号の大半は雪の下に埋もれ、湿原や牧場のみどりも望めない、この沿線の様子を“夏の旅”のようにリアルに読み取ることができたのでしょうか。

② 地図の“色”は、“記号”です！



『楽しく学ぶ小学生の地図帳』(初訂版) p.43
「①北海道地方の地図」の凡例など

に近づけて選ばれた“色”であり(一般的な4色印刷に更に緑色の特殊インクを用いて5色印刷にしている)、ある“色”には斑点や影などを加えて一層その効果を期待しているのです。

実は、4年生の教室で子どもたちが地図の“色”に臨場的なイメージを抱いて作業を進めていくのは、その効果でもあるのです。

しかし、この“記号”としての“色”も「季節は？」と問われると、そのすべてに答えられるものとは言えません。土地利用にしても土地の高低の表現にしても、4年生の子どもたちが抱いたよ

うに、どの図幅も概して“夏”のイメージで統一されているように思われるのです。

地域をとらえる場合、特に四季のある日本では“季節”は重要な意味をもちます。水田・畑・果樹園などの土地利用は“季節”によってさまざまな“色”が広がります。また、高原や山地も“季節”によってその“色”も様変わりするのですから。

先生の話によれば、つぎの時間の4年生の教室は、“冬の釧網本線の旅”に挑む子どもたちの緊張で、いつもとは違った雰囲気の流れが流れていたようです。その勢いは、対象とした「北海道地方南部の地図・拡大図(p.46)」の枠を越え、前のページにある「北海道地方の地図(基本図)と凡例」や、「網走付近のようす(資料図)」、「釧路湿原のようす」にある“冬”の情報を持ち込みながらの作業になったということです。



『楽しく学ぶ小学生の地図帳』(初訂版) p.43 ~ 44
「③網走付近のようす」

③ 基礎こそ、問題解決的な接近を！

地図帳活用の基礎的な指導として、絵記号、記号、色を、地図帳にある凡例をそのまま知識的に記憶させていく教室が多く見られます。そして、それをあたかもおうむ返しのごくテストにして「わかる・わからない」を論じているのです。

そうした中で、この4年生の教室の試みは、問題解決的な接近のすぐれた例として注目すべき実践ではないでしょうか。ここには、先生も子どもたちも互いに地図にこだわりながら自ら動き、やがて地図や地図帳を自分たちのものにしていくという確かな過程が見られるのです。いかがでしょうか。